

土台を据える 岩の上に建てる

信仰によって神のことばを宣言する以上に、神の力を解放する効果的な方法はないことを、妻と私は経験によって学びました。実際、私は宣言することについて繰り返し語ってきましたが、語るのに疲れることはありませんでした。もし、私とその「宣言」という武器を用いることを学ばなかったら、妻も私も、こんにち、このように生きているかわかりません。実は、私たち夫婦はそれぞれ違った時期に重い病気を患ったことがあり、私は致命的な病気にかかりました。しかし、今日、私がここにいることを、医者と神さま、そしてみことばの力に感謝します。私は、このように元気に主に仕えることかできています。

今日、私たちは、「土台を据える」というシリーズにふさわしい、イザヤ 55 章 10-11 節を宣言したいと思います。

「雨や雪が天から降ってもとに戻らず、必ず地を潤し、それに物を生えさせ、芽を出させ、種蒔く者には種を与え、食べる者にはパンを与える。そのように、わたしの口から出るわたしのことばも、むなしく、わたしのところに帰っては来ない。必ず、わたしの望む事を成し遂げ、わたしの言い送った事を成功させる。」

アーメン。

このシリーズの最初のメッセージのタイトルは、「岩の上に建てる」です。そのことから始めていきたいのです。聖書は、良い教えの模範で、さまざまな教えの原則があります。特に、人々を導くためには、人々がすでに知っていることから語り始め、知らないことへと導いていきます。人々がまったく知らないことから始めることは、決してしません。聖書がとる方法の一つは、非常にシンプルで、なじみやすく、日常の経験や活動を取り上げ、それらに霊的な適用を提供することです。様々な例があります。聖書は、種を蒔く農夫や、網で魚を取る漁師について、また、武具を着けた兵士について語っています。そして、まったく異なる文脈において、婚礼のために準備する花嫁について語っています。これらは、この原則のほんの数例に過ぎません。

しかし、私が焦点を当てたい特になじみ深い活動は、建物を建てることです。このクリスチャン生活の描写は、聖書にある他のあらゆる描写と同じくらい用いられていると思います。

最初に、ユダの手紙 20 節、21 節の信者としての私たちへの勧めのことばを見てみましょう。

「しかし、愛する人々よ。あなたがたは、自分の持っている最も聖い信仰の上に自分自身を築き上げ、聖霊によって祈り、神の愛のうちに自分自身を保ち、永遠のいのちに至らせる、私たちの主イエス・キリストのあわれみを待ち望みなさい。」

この聖句は、私たちが最も聖い信仰の上に自分自身を築き上げなければならないと言っています。それには、この建築の比喩が当てはまります。私たちには、自分自身を築き上げる責任があります。

そして、エペソ 2 章 21、22 節では、主の聖なる宮について語られています。

「この方であって、組み合わされた建物の全体が成長し、主にある聖なる宮となるのであり、このキリストであって、あなたがたともに建てられ、御霊によって神の御住まいとなるのです。」

神の住まいとして、聖霊にあつてもに築き上げられた、クリスチャンのコミュニティについて語られています。

そして、第一ペテロ 2 章 4-5 節では、生ける石であるイエスについて語られています。ペテロはこのように言っています。

「主のもとに来なさい。主は、人には捨てられたが、神の目には、選ばれた、尊い、生ける石です。あなたがたも生ける石として、霊の家に築き上げられなさい。そして、聖なる祭司として、イエス・キリストを通して、神に喜ばれる霊のいけにえをささげなさい。」

私たちは、ひとり一人が組み合わされて、主が住まわれる聖なる宮を築き上げていく、生ける石にたとえられています。

そして最後の例は、使徒の働き 20 章で、パウロは特別な愛をもってエペソの長老たちへ別れのあいさつをしています。なぜなら、エペソでのパウロの奉仕は、どの地域よりも大きな成果をもたらしたからです。この中でパウロは、別れの挨拶、そして、エペソの人々がこの地上で自分(パウロ)を再び見ることはないだろうと伝えています。それは、彼らにとって非常に悲しいことだったに違いありません。この使徒の働き 20 章 32 節こそ、パウロが彼らに残したかった最後のものでした。

「いま私は、あなたがたを神とその恵みのみことばとにゆだねます。みことばは、あなたがたを育成し、すべての聖なるものとされた人々の中にあつて御国を継がせることができるのです。」

ここで、パウロは、私たちを育成する主な手段は、神の恵みのことば、聖書であると言っています。また、みことばは私たちを育成し、信仰によって、イエス・キリストのために聖なるものとされた人々の中で御国を相続させることができると言っています。

さて、私は建築家ではありませんが、一つのことだけは知っています。それが煉瓦であれ、石であれ、コンクリートであれ、木であれ、いかなる耐久性のある建物であっても、重要な部分は土台であるということです。そして、聖書は特にこのことを取り扱っており、ここでは、私たちすべてにとって非常に重要なものであると言っています。土台は、その上に建てることのできる建物の大きさと重量を左右するため、正しい土台が求められます。土台が制限を設けるのです。これは、クリスチャン生活においても当てはまります。あなたの土台の許容範囲以上に素晴らしいクリスチャン生活を建てることは不可能です。これは重要な問題なのです。あなたの土台はどうでしょうか。あなたは、正しい土台を据えているでしょうか？

さて、適切な、いやそれだけで十分な土台は一つだけで、それはある人物です。イエス・キリストです。パウロがコリ

ントのクリスチャンに宛てて書いた、コリント人への手紙第一の3章で2つの比喩を用いています。パウロは農業のたとえから始めて、建築のたとえに進んでいます。9節から11節です。

「私たちは神の協力者 [私たちは神とともに働く者] であり、あなたがたは神の畑 [農業的比喩]、神の建物です [建築的比喩、パウロは続けて建築的比喩を用いています]。与えられた神の恵みによって、私は賢い建築家のように、土台を据えました。そして、ほかの人がその上に家を建てています。しかし、どのように建てるかについてはそれぞれが注意しなければなりません。というのは、だれも、すでに据えられている土台のほかにも、ほかの物を据えることはできないからです。その土台とはイエス・キリストです。」

このように、パウロは、クリスチャン生活の土台はただ一つしかなく、それはイエスご自身であると言っています。そしてその土台の上に建てられなければ、試練や困難に耐えることができません。ですから、私たち一人一人が自分の人生を何の上に建てているかを見極めることは非常に重要なのです。私たちは、本当に主イエス・キリストの上に建てているでしょうか？ 私たちはイエスと個人的な交わりを持っているでしょうか？ またイエスと個人的に交わることを可能にする、イエスの知識を持っているでしょうか？

イエスにあるこの土台を据えるということは、何よりも重要なことです。ですから、少し時間を取って、この土台、すなわち私たちの人生におけるイエスの土台をどのように据えるかについて考えたいと思います。今、みなさん一人一人が自分自身の生活、また霊的状态、霊的経験を吟味して、この土台が正しく据えられているかどうかを吟味していきましょう。

いくつかの基本的な教えをマタイ16章から見ていきましょう。13節以降で、イエスが弟子たちに語られているところです。

「さて、ピリポ・カイザリヤの地方に行かれたとき、イエスは弟子たちに尋ねて言われた。『人々は人の子をだれだと言っていますか。』』

それから、イエスはそれを、非常に個人的な質問にされました。15、16節

「イエスは彼らに言われた。『あなたがたは、わたしをだれだと言いますか。』シモン・ペテロが答えて言った。『あなたは、生ける神の御子キリストです。』』

これは、ペテロの人生において、またキリスト教の歴史全体において決定的な瞬間でした。16-18節。

『『あなたは、生ける神の御子キリストです。』するとイエスは、彼に答えて言われた。『バルヨナ・シモン。あなたは幸いです。このことをあなたに明らかに示したのは人間ではなく、天にいますわたしの父です。ではわたしもあなたに言います。あなたはペテロです。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てます。ハデスの門もそれには打ち勝てません。』』

そして、イエスは、ペテロとのこの体験を、私たちがイエス・キリストご自身にある土台を据えることができる方法を確立するために用いられました。

最初に、ここで用いられていることばのいくつかについて説明しなければなりません。18 節でイエスは、「あなたはペテロです。」と言っており、それはギリシャ語では、ペトロスです。また「この岩」とは、ギリシャ語ではペトラで、その上に「私の教会を建てます。」と言っています。ペテロは教会の基礎であるとたとえられることが多いです。もし、そうであるなら、それは非常に不安定な建物であると言わなければなりません。なぜなら、少しあとで、イエスはペテロを「下がれ、サタン！」と非難しておられるからです。さらにのちには、ペテロは主を 3 度も否定しました。さらに、復活のあとでさえ、ユダヤ人たちを恐れて、福音の真理に妥協したことでパウロから非難されました。ですから、教会がペテロの上に、また私の上に建てられていないことを感謝します。

実際にこの箇所から明らかにされていることは、ギリシャ語聖書の原文でも非常に明確で、新改訳聖書では脚注にあるように、「あなたは、ペテロ(ペトロス)で、この岩(ペトラ)の上に私の教会を建てます。」です。ペトロスとは、ギリシャ語では大きな石という意味です。通常、人々が誰かと一緒に運ぶような大きな石です。一方、ペトラは岩盤から突き出たごつごつした岩という意味です。それは崖のようなものです。しかし、忘れてはならない重要なことは、それが岩盤の一部であるということです。岩盤とは何でしょうか。まさにペテロが経験した、聖霊によってのみ啓示される、イエスとはだれであるかという認識です。聖霊によって、父なる神が、イエスがだれであるのかを啓示しない限り、イエスを本当に知ることは、誰にもできないのです。

ですから、これはペトラで、クリスチャンの信仰の基礎となるべき岩盤です。その岩盤とは、大工の息子でも、歴史的象徴でもない、永遠なる、被造物ではない神の御子イエスの個人的な体験と、個人的な啓示です。私たちが岩の上に建てようとするなら、そこまで至らなければならないところです。ペテロが通った体験は、私たちの体験でもなければならないのです。

私はこれまで何度も人々に語ってきたことですが、人が教会に参加し、宗教的儀式を行ない、祈りをしても、その人が変えられないことはあり得るのです。しかし、もし、イエスと本当の出会いをすれば、あなたは変えられます。イエスに出会わない人は、変えられることなく、そのままです。ですから、私たちはこのように自分自身に聞いてみなければなりません。「私は今までに、主イエス・キリストと人生を変えるような個人的な出会いをしたことがあるだろうか。」と。

ペテロがこの出会いによって経験した、連続する4つの段階を提案したいと思います。第一は、**対面**です。イエスとペテロは顔と顔を合わせて直接会いました。仲介者も、祭司もなく、彼らの間には誰もいませんでした。直接で個人的なイエスとの対面です。それこそ、私たちが達しなければならないところです。イエスは別の箇所で、こう言われました。「わたしは門です。だれでも、わたしを通って入るなら、救われます。」神の国に至る道は一つだけで、それはその門を通ることです。門は、教会ではなく、教理でもなく、イエスです。「わたしは門です。」

第二に、対面の体験は、聖霊を通して父なる神によって与えられる啓示へとつながります。イエスは言われました。「このことをあなたに明らかに示したのは人間ではなく…。」この人間というのは、脚注にあるように、直訳すると、肉と

血です。生まれつきの感覚では、そこにたどり着くことはできません。啓示によらなければなりません。もう一度言いますが、これは不可欠なのです。個人的な啓示がなければ、イエスが神の永遠の御子であることを真に知ることは、誰一人できません。あなたは神学を学ぶことも、聖書学校に行くことも、牧師になることもできます。しかし、イエスとの個人的な出会いなくしては、あなたはイエスを知ることができないのです。この啓示は、御子イエス・キリストを通して父なる神から来るものです。

みなさんにお聞きします。私に答えなくても構いません。あなたは個人的にイエスと出会ったでしょうか。私は、50年以上も前、第二次世界大戦の時、真夜中、軍のバラック小屋の中で、イエスと出会いました。私には教理の知識は全くなく、福音的な言葉の知識もなく、その時は、私が救われたとか、生まれ変わったと言うこともできませんでした。そのようなことはすべて、のちになって学びました。しかし、お伝えしたいことは、私は変えられた、ということです。劇的に、そして永久的に変えられたのです。完全にされたものではありません。実際、みなさんに告白しますが、私は今もなお完全ではありません。しかし、私は変えられました。

第三は、聖霊が私たちに示してくださることを認めなければならないということです。私たちは、このように言わなければなりません。「そうです。私は信じます。受け取ります。」私たちは、何らかの応答をしなければなりません。それは自動的なものではなく、私たちの内に起こることが求められます。

そして第四は、イエスへの私たちの信仰を公けに告白しなければなりません。それこそ、イエスがペテロに告白させた、「あなたは、生ける神の御子キリストです。」なのです。ペテロはそれを公けにしました。人々は隠れ信者について噂しますし、特に、信者だとわかると命さえ危ない国にいる場所において、隠れ信者がいることは私も認めます。しかし、私は、どのような人でも、永遠に隠れ信者のままでいることができるとは思いません。

マタイ 10 章 32、33 節でイエスが言っておられることを見ましょう。

「ですから、わたしを人の前で認める者はみな、わたしも、天におられるわたしの父の前でその人を認めます。しかし、人の前でわたしを知らないと言うような者なら、わたしも天におられるわたしの父の前で、そんな者は知らないと言います。」

選択肢が3つあるのではなく、2つだけというのが、イエスの特徴的な方法です。イエスを告白するか、否定するかのどちらかです。そして、あなたが適切な状況で告白することに失敗するなら、事実上、否定したことになるのです。ですから、私たちひとり一人は、ある時点で主イエス・キリストへの信仰を公けに認めなければならないときが来ます。これは、多くの人にとって重大な瞬間です。

私はクリスチャンになった後、軍隊にいて発見したのですが、人に最初に出会ったときに、自分の立場をすべての人に知ってもらおうというのが最善であるということです。そうすると、あなたは、後になって「いや、最初に言っていなかったんだけど、実は・・・」と言う必要はないのです。ですから、私は、宗教的行為のようなものではなく、当時私がいたバラック小屋で毎晩、ベッドの傍らでひざまずき祈りました。私は、周りの人たちに自分がどういう者であるかを伝えただけです。それはとても簡単なことです。あいまいな態度をとり、自分が何を信じているかを率直に言わないクリス

チャンたちも見てきましたが、あとになって自分の信仰を告げることのほうが難しいのです。ですから、みなさんにお勧めしたいと思います。路傍伝道をする必要はありませんし、あなたが説教者になる必要もありません。主婦や学生でいいのです。しかし、あなたが置かれているところで、あなたが神の御子イエスを信じていることを知らせましょう。

では、この出会いの 4 段階をまとめましょう。これらは、私たちの個人的な人生において、どのようにイエスの土台を据えるかという基本となるものです。

第一に、**対面**がありました。

第二に、**聖霊**を通して父なる神から与えられる**啓示**がありました。

第三に、ペテロは、**認める**応答をしました。

第四に、ペテロは、**公け**に告白しました。

ここで、みなさんはこう尋ねるかもしれません。「そのような啓示は、今も可能ですか？」ペテロや他の弟子たちが個人的に経験したのとまさに同じように、あなたや私のように人々にとっても可能なのでしょうか。

2 つの重要な点を知る必要があります。まず最初に、イエスは、大工の息子であることをペテロに啓示したのではないことです。イエスは、かなり前から大工の息子だと知られていました。イエスは、ペテロに神の永遠の御子であることを啓示したのです。ヘブル人への手紙 13 章 8 節でこう言っています。

「イエス・キリストは、きのうも、きょうも、いつまでも、同じです。」

イエスには、変化はなく、また変わっていくこともありません。そう、それは言葉や文化、服装のことではなく、イエスという永遠のお方についてです。それこそ、ペテロがおそらく人生で初めて経験したことです。ペテロは、イエスがだれであるかという啓示をまさに得たのです。

二つ目に、その啓示は、聖霊を通して与えられたことです。聖書は聖霊を永遠の霊、時間を超越した霊と呼んでいます。時、流行、歴史、習慣、言語、そのようなものが聖霊を変えることはありません。

その二つの理由から、ペテロが経験したこの直接的なイエスの個人的な啓示を、あなたや私も同じく持つことが可能なのです。まず、啓示された神の永遠の御子であるがゆえに、そしてイエスを啓示する永遠の霊のゆえです。

さて、次の具体的な問題に移りましょう。もしあなたが土台を据えたなら、土台の上にどのように築いていくでしょうか。最初に、建築するという比喻を用いましたね。ですから、ここで次の極めて重要で具体的な問題です。あなたは土台の上にどのように建てるか、ということです。マタイ 7 章の最後で、イエスが語っておられる、賢い人と愚かな人がそれぞれ違った方法で家を建てる有名なたとえ話があります。マタイ 7 章 24 節からです。

「だから、わたしのこれらのことばを聞いてそれを行う者はみな、岩(岩盤、ペトラ)の上に自分の家を建てた賢い人に比べることができます。雨が降って洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけたが、それでも倒れませんでした。

した。岩の上に建てられていたからです。また、わたしのこれらのことばを聞いてそれを行わない者はみな、砂の上に自分の家を建てた愚かな人に比べることができます。雨が降って洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけると、倒れてしまいました。しかもそれはひどい倒れ方でした。」

まず、それぞれの家は、同じ試みを受けるということを理解することが重要です。試みに会わない家はありません。同じ嵐が両方の家に打ちつけます。そして、クリスチャン人生は、嵐のない人生ではないことをお伝えしなければなりません。あなたは嵐を経験します。神さまは、あなたにそのようなことが起こらないと保証されることは決してありません。事実、パウロとバルナバは、初代教会にこう言いました。「私たちが神の国に入るには、多くの苦しみを経なければなりません。」もし、あなたが苦しみのない道にいるなら、その道は神の国に続くものか疑わしいです。なぜなら、パウロは、「私たちが神の国に入るには、多くの苦しみを経なければなりません。」と言ったからです。私たちがなぜ苦しみを通るのかを説明することがこの話の狙いではありませんが、信じてください。神さまはそれに目的を持っておられるのです。もし、今あなたがその苦しみの中を通過しているなら、あきらめないでください。神さまはあなたを切り抜けさせ、神さまはあなたを取り扱い、他の方法では学ぶことができなかったことを、教えてくださったのだと後になってわかるでしょう。

私はどのようにしてそれを知ったと思いますか。個人的経験からです。私は理論を解くことはめったにありません。

では、賢い人はどのように建てましたか。とてもシンプルな 2 つの方法です。イエスのことば、聖書のことばを聞いて行なうことによってです。あなたはどのようにその土台を据えることができるでしょうか。まったく同じ方法です。聖書が語っていることを聞いて、それを行なうのです。ただ聞くだけの者にならないでください。なぜなら、聖書はそのような人に約束を与えたのではなく、聞いて行なう人に与えたのです。それは具体的です。あなたの人生に、聖書の教えとイエスの教えを適用することです。それを続けていくとき、神さまは、あなたが真理を適用する必要がある新しい領域を開き続けてくださるのです。

私はクリスチャンになって 50 年以上になりますが、神さまは、みことばの適用のために新しい道を示し続けてくださっています。みことばを適用するために必要な私の人生の新しい領域です。私の建物は完全ではなく、建てている途中です。しかし、いくつもの嵐を成功のうちに通り抜けさせてくださっている神さまに感謝します。

ルカ 6 章にもう一つとてもよく似ている、そして重要なことが付け加えられているイエスのたとえ話があります。ルカ 6 章 46 節から 49 節を開けてみましょう。語っているのは、イエスです。まずこう言っておられます。

「なぜ、わたしを『主よ、主よ』と呼びながら、わたしの言うことを行わないのですか。」

これは重要な質問です。イエスに従わないなら、イエスを主と呼ぶことは無意味です。なぜなら、この「主」という呼称は、従うべき人を指すからです。イエスは、あなたの生き方に影響を与えない口先だけの告白に注意しなさいと言われました。

そしてこう続けています。

「わたしのもとに来て、わたしのことばを聞き、それを行う人たちがどんな人に似ているか、あなたがたに示しましょう。その人は、地面を深く掘り下げ、岩の上に土台を据えて、それから家を建てた人に似ています。洪水になり、川の水がその家に押し寄せたときも、しっかり建てられていたから、びくともしませんでした。聞いても実行しない人は、土台なしで地面に家を建てた人に似ています。川の水が押し寄せると、家は一ぺんに倒れてしまい、そのこわれ方はひどいものとなりました。」

ここで、マタイの福音書にはない、ある重要な詳細がルカの福音書に加えられています。みなさんはお気づきになったでしょうか。その人は、岩盤に届くように地面を深く掘り下げなければなりません。その人は岩盤の上に建てることができるまでに、多くのものを取り除かなければなりません。そして、それは、私たちの大多数にとっても真理で、すべての人ではないかもしれませんが、クリスチャン文化の中で育った人のほとんどが、岩に届くまでに多くのものを取り除かなければなりません。また、まったくクリスチャン文化の背景がない中で育った人たちも、多くのものを取り除かなければなりません、それらは異なったものでしょう。

私はみなさんに、深く掘り下げて取り除く必要のある 5 つを提案しましょう、一つは、伝統です。すべての伝統が悪いわけではなく、中には良い伝統もあります。すべての伝統を捨てたくはありませんが、イエスはある日、こう言われました。「こうしてあなたがたは、自分たちの言い伝えのために、神のことばを無にしまいました。」あなたは、伝統を信じ、聖書と一致しないそれらの伝統を行なっています。イエスは、今日のユダヤ人たちにまったく同じことを言うであろうと、私は考えます。「こうしてあなたがたは、自分たちの言い伝えのために、神のことばを無にしまいました。」ただ、ユダヤ人だけに当てはまるものではありません、なぜなら、それはクリスチャンの背景を持った私たちも、伝統や、やり方、行ない、語ることばなど、聖書と一致しない不必要な伝統を受け継いでいます。ですから、私たちはとても注意深く吟味しなければなりません。

私は特定の提案をすることは控えたいと思いますが、私ができる多くのことがあるのです。

そして、二つ目に、私たちは偏見を取り除く必要があります。みなさんの中で、これまで一度も偏見を持ったことがない人はいないはず。それをすでに処理した人もいるかもしれません。しかし、あらゆることに偏見は存在します。人種の偏見もあります。悲しいことですが、世界は今日、人種的な偏見で満ちています、例えば、南アフリカのような素晴らしい変化を遂げた国、そこは、人種的な偏見が特定の人々を教会から排除していたのです。恐ろしい考え方です！しかし、人種的な偏見はその地域だけではありません。アメリカは、人種的な偏見で満ちていますし、多くの場所で今日もあるのです。

私はイギリス人ですが、イギリス人も偏見を持っています。私はそのような人々の中で成長したので、それらの偏見を深く掘って取り除かなければなりません。私の家族の背景はインド系で、代々、インドでイギリス軍として仕えました。私は12歳くらいの時、昼食中に何気なく、「どうしてお昼ごはんはインド人を呼ぶことができないのかな。」と言いました。家族の反応は恐ろしいものでした。どうしてそんな風に反応するのだろうと思いました。あとになって、それが偏見であると気づきました。信じてください、私は異なる人種の背景からさまざまな人々を見ていますが、人種的な偏見がまったくない人は、ほとんどいないのです。

そして、教団教派の偏見もあります、多くの人は特定の教団に対して、どこか否定的な見方をします。

*** 私の最初の妻はデンマーク人のクリスチャンでした。彼女はデンマークのルーテル教会で育ったのですが、彼女は信者として 2 回目の洗礼を受け、教会の人々をうろたえさせました。彼女はデンマークの州立学校の教師だったので、職にとどまることができるのかを聞くために、議会に尋ねに行ったのです。彼女は死ぬまでルーテル教会と戦い続けました。私はそれを正当化しようとするのではなく、それが彼女の弱さであったのでしょうか。

***この部分は必要ないかも、ですね。

私自身、人がある特定の教団に属していると聞くと、その人たちに会ったこともないのに、彼らに対して反対的な態度をとることがあります。「彼らは、あのよう考え、こういうところが間違っている。」などと思い巡らします。私が経験から学んだことは、可能な限り、会ったこともない人のことを決して裁かないということです。私は、自分の知る限り、最も正しい人たちが、間違った教えの教派から来ている人々に会ったことがあります。また、間違った人たちが正しい教派から来ていることもあります。ですから、どうか教団教派の偏見を持たないでください。

三つ目に、社会的偏見があります。私も、その中で育った一人です。自分がそのような偏見を持っていると気づいたこともなかったのですが、イギリスの有名な中高、ケンブリッジ大学で教育を受けました。私は世界の人たちがどのような生活をしているのか知りませんでした。そして私はイギリス軍に入隊し、さまざまな人たちと一緒に生活することになり、自分のイギリス人についての知識がどれほどわずかであったかに気づき始めました。その軍での 5 年半の経験を神に感謝します。私の多くの社会的偏見を取り除くことになったからです。軍の将校の家庭に育ち、その生活に慣れており、そこから何も学んではいませんでした。あなたが同じ階級の人と知り合っても、違いは見えません。しかし、下の階層からの人と出会ったとき、違いが見えるのです。これまで私は、「神さま、私は下の階層からの人をどのように見ているのでしょうか。」と常に聞こうとしてきました。

実に様々な偏見があり、個人的な偏見もあります。大声でしゃべる人が嫌いな人もいます。赤毛の嫌いな人もいます。私たちほとんどの人が、実に多くのばかげた個人的な偏見を持っています。私には、リンゴをむしゃむしゃと食べる人に対する偏見があります。その偏見と戦ってはいるのですが、やはりその食べる音が嫌いなので、まだ偏見があります。

さらに、イエスがどのような方であるかの間違った見解を持った、先入観という偏見があります。異邦人であるとか、柔和で穏やか、クリスマス・パーティに登場するイエスなど、それらは本当のイエスではありません。まったく違っておられ、とても衝撃的で、私たちの偏見と先入観を取り除こうとされるお方です。

私たちは、他にもいろんな形で先入観を持ちます。クリスチャンになるとはどんなことなのかという先入観があります。私が育ってきた背景にも関連しますが、私は「もし、クリスチャンになったら、残りの人生はみじめな人生になる。」と考えていました。パット・ブーンのように、「天国はみじめな地上の 70 年に、見合うところではない。」と考えており、イエスに出会うまでは、私はクリスチャンになる可能性は全く持っていなかったのです。

そして四つ目に、とてもとても危険な、不信仰というのがあります。私は、時々、人々に説教をするとき、自分も含め、

すべての人に不信仰を捨てるということから始めることがあります。なぜなら、私たちの多くが様々な領域で不信仰に捕らわれているところがあるからです。私たちの思いは、信仰に対してしっかりと開かれていないのです。

最後の五つ目に、私はこれが一番重要だと思いますが、反抗があります。「いやあ、私は反抗的ではありません。」とおっしゃるかもしれません。いえ、あなたは反抗的です！ もし、あなたが気づいていないのなら、反抗的であり続けるでしょう。このことについて神学的に踏み込みたくありませんが、アダムの子孫はみな、内側に反抗を持って生まれてくるのです。私たちは反抗的であることを知って、それを取り扱わなければなりません。神さまは唯一、反抗のための治療法を持っておられるお方で、それが何であるかをご存知ですか？ 死刑です。神さまは人を教会に送られたのでもなく、黄金律を教えたのでもなく、みことばの暗記をさせたのでもありません。死刑にしたのです。しかし、神さまのあわれみは、イエスが十字架で死なれた 2000 年前にその死刑にとって代えられたことです。私たちの古い人は、イエスとともに十字架につけられました。私たちは、自分たちの内側に反抗的なものがあることを認め、それを十字架につけたいと願わなければならないのです。

これはクリスチャン生活においてとても重要なことなので、聖書を開いてみましょう。あなたは聖書をどのようにとらえていますか。イエスと同じようにとらえていますか。ヨハネの福音書 10 章 35 節を見てみましょう。文脈を見ていくには時間がかかりますので、それはしません。

「もし、神のことばを受けた人々を、神々と呼んだとすれば、聖書は廃棄されるものではないから…」

これは非常に重要な聖句です。なぜなら、イエスは、聖書に二つの呼び方を用いているからです。「神のことば」と「聖書」です。聖書を、神のことばと呼ぶとき、それは人からではなく、神さまから与えられたものという意味です。人を介して来ているかもしれませんが、それは神さまからのことばです。

そして「聖書」とは限定的な語句です。それは書き記されたものという意味です。神は書き記されなかった多くのことを言われました。しかし、聖書に反対する神学者により、書き記されるべきだと考えられた、神の語られたことが書かれているものです。それが聖書です。それは書かれたものという意味です。

それについて、イエス一つのシンプルで決定的な宣言をしています。「聖書は破棄されるものではない。」みなさんは、聖書の靈感についてや、権威について好きだけ議論することができますが、イエスはただ、これだけを言われました。「聖書は破棄されるものではない。」それは、絶対的な権威であると。それはすべて成就されると。その中に書かれていることはすべて、正確に起こるのだと。あなたはそれに反対することも、否定することもできますが、それを破棄することはできません。事実、もしあなたが聖書を否定するなら、最終的には聖書があなたを砕いてしまうでしょう。聖書は破棄されるものではないのです。

みなさんも、声を合わせて私と一緒に言いましょう。「聖書は破棄されるものではありません。」

次に、もし誰かと一緒にこのメッセージを聞いておられたら、隣の人を目を見て言いましょう。「聖書は破棄されるものではありません。」

はい、それはもう理解しましたね。ご存じの方もおられるかもしれませんが、ばかげたファンタジーを聖書に結び付けて、最終的に聖書をまったく無益にしてしまう高等批評と呼ばれるものがあります。悪魔が、みなさんや私の人生にしたいと思っていることは、権威と聖書の正確さに対する信仰をむしばむことです。しかし、もし私たちがイエスのようにシンプルに、聖書は破棄されるものではない、と言うならどうでしょうか。「サタンよ、私の言うことが聞こえたか？ 聖書は、破棄されるものではない。」

次に、私が言いたいことは、聖書は単に神のことばだけではなく、イエスご自身が神のことばであるということです。これは、ヨハネの福音書に二箇所あります。有名なのは、1章1節で、

「初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。」

これは、イエスを示しています。イエスはことばであつたし、今もことばです。

そして、1章14節では、

「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた。」

ですから、私たちはクリスマスでイエスが生まれたことを祝いますが、ことばが人となったのは、実際はクリスマスの季節ではありません。しかし、イエスは、常にことばでした、永遠にイエスは神とともにあったことばです。

そしてイエスの再臨の時、どのように戻って来られるかをあなたはご存知ですか。どのような名前でしょうか。お教えしましょう。黙示録19章です。イエスが最初に来られた時、ことばであつたこと、そして戻って来られるときも、ことばであることは注目に値します。これは、地上に王国を確立するために栄光を持って天から来られるイエスの姿です。黙示録19章11-13節です。

「また、私は開かれた天を見た。見よ。白い馬がいる。それに乗った方は、『忠実また真実』と呼ばれる方であり、義をもってさばきをし、戦いをされる。その目は燃える炎であり、その頭には多くの王冠があつて、ご自身のほかだれも知らない名が書かれていた。その方は血に染まった衣を着ていて、その名は『神のことば』と呼ばれた。」

そう、イエスは昨日も、今日も、いつまでもことばなのです。

そのことは、非常に重要なことを導き出します。イエスと聖書は完全な一致があるということです。あなたが一方に対する態度は、他方にも当てはまるということです。イエスを信じていて、聖書を信じないことはあり得ません。あなたは、その事実を受け入れますか。イエスは神のことばです。イエスは、人となったことばです。聖書は、書き記された神のことばです。あなたが一方に対する態度は、もう一方にも同じでなければならないのです。その2つには完全な一致があるのです。

このメッセージも終わりに近づきましたので、ここでヨハネの福音書14章にある、あなたにも関係する、神のことばに

ついでに5つの事実を、取り上げましょう。わずか3節の中で、イエスが弟子たちに別れのことばのように、しばらくすると彼らがイエスを見なくなると警告しています。それは弟子たちにとって衝撃的な時で、その啓示に圧倒されました。しかし、その中でイエスは聖書が私たち信者にとって、どのような意味があるかの素晴らしい啓示を与えています。ヨハネ 14 章 19 節です。

「いましばらくで世はもうわたしを見なくなります。しかし、あなたがたはわたしを見ます。わたしが生きるのに、あなたがたも生きるからです。」

イエスは、イエスを認めない人たち、すなわちこの世の人と、ご自身の弟子たちとの間に違いを設けておられます。世はわたしを見なくなるが、あなたがたはわたしを見ると言っておられるのです。

そして、イスカリオテではない、もう一人のユダが 22 節でとても重要な質問をしています。

「イスカリオテでないユダがイエスに言った。『主よ。あなたは、私たちにはご自分を現そうとしながら、世には現そうとなさらないのは、どういうわけですか。』』

ユダは、イエスが世はわたしを見なくなるけれど、あなたがたはわたしを見ると言ったので、そう聞いたのです。彼の質問は、イエスは、どのようにして、ご自身を世には現わさず、私たちに現わすのかということです。そして、イエスの答えは重要な真理で満ちています。23 節です。

「イエスは彼に答えられた。『だれでもわたしを愛する人は、わたしのことばを守ります。そうすれば、わたしの父はその人を愛し、わたしたちはその人のところに来て、その人とともに住みます。』』

このイエスの答えから神のことばの 5 つの重要な事実を引き出したいと思います。一つ目は、イエスは世にではなく、弟子たちにご自身を現わすと言われたことです。世と弟子たちを区別するしるしは何でしょうか。それは、神のことばを守ることです。本当の弟子は、イエスのことばを守ります。また、彼らは教団教派のレベルによってではなく、ことばにつながっている方法によって違いが生じるのです。それがあなたを作り上げているものであり、そうでなければ、あなたを本当の弟子であることから妨げられてしまいます。それがあなたの神のことばに対する関係なのです。神のことばを守ることは、世から弟子たちを区別することです。

今、このメッセージを聞いておられるみなさんも、そのどちらかに分類されます。もし私たちが弟子であるなら、神のことばを守ります。もし、あなたが神のことばを守らないなら、私たちは世に属しています。その世とは、イエスを主としていません。

そして二つ目の真理は、「もしあなたがたがわたしを愛するなら、あなたがたはわたしの戒めを守るはずです。」と言われたことです。神のことばを守ることは、神さまに対する弟子たちの愛の究極のテストです。愛は、従順の動機です。信者として、恐れによるのではなく、愛に動機づけられるということを理解することは非常に重要です。ある意味、律法は恐れという動機を利用します。もし、このことをしたなら、あなたは罰せられるというものです。しかし、

それは機能しません。私は何人もの子どもたちの成長を助けてきました。(みなさんは、私がどのくらい多くの子どもを育ててきたかを信じないでしょうから、深くは説明しません。)親として子どもたちをコントロールしている間は、恐れを利用することができますが、子どもたちが離れると、恐れに動機づけられてきた子どもたちは変わります。彼らを忠実で誠実に保つ唯一の動機は、愛です。父なる神さまとイエスは、恐れではなく、愛を建てる知恵を豊かに持っておられました。ですから、神のこぼを守ることは、神さまへの弟子たちの愛を究極のテストなのです。「もしあなたがたがわたしを愛するなら、あなたがたはわたしの戒めを守るはずです。」愛は、従順の動機です。

また、イエスは言われました。「だれでもわたしを愛する人は、わたしのこぼを守ります。そうすれば、わたしの父はその人を愛し…」というのが三つ目の素晴らしい事実です。神のこぼを守ることは、神さまが私たちに特別な愛をもって愛してくださることにつながるのです。神さまは、ある意味では全世界を愛しておられますが、イエスの本当の弟子たちには、かなり違ったレベル、違った種類の愛を持っておられます。

ここで私たちは、ユダが質問した疑問が出てきます。「主よ。あなたは、私たちにはご自分を現そうとしながら、世には現そうとなさらないのは、どういうわけですか。」イエスの答えはこうでした。「もしあなたがたがわたしを愛するなら、あなたがたはわたしの戒めを守るはずです。」では、キリストが私たちにどのように現わすのでしょうか。こぼによってです。こぼを守ることを通して私たちはイエスをさらに知ることができるのです。これが四つ目の事実です。私たちはすばらしい、霊的体験をするかもしれません。第三の天へ引き上げられる、その他のようなこともあるかもしれません。しかし、ほとんどの人にはそのようなことが起こりませんし、それは父なる神さまやイエスがご自身を啓示する基本的な方法ではありません。その方法は、神のこぼを守ることによってなのです。

そして最後に、これは驚くべき宣言です。「だれでもわたしを愛する人は、わたしのこぼを守ります。そうすれば、わたしの父はその人を愛し、わたしたちはその人のところに来て、その人とともに住みます。」聖書で神について複数形が用いられる箇所は非常に少ないのですが、この箇所はその一つです。イエスは、わたしたち、すなわち、わたしの父とわたしは、その人のところへ来て、ともに住むと言っています。それは、ワクワクするような宣言で、父なる神と神の御子が来て、私たちと一緒に住みたいと願っておられるのです。父と御子は個人的な住まいを私たちに設けたいのです。しかし、どのようにでしょうか。こぼによってです。もし私たちがこぼを愛さないなら、こぼに従わないなら、神さまは私たちと共に住む場所を設けてはくれません。

また、このメッセージの終わりに、とても重要な考えを言わせてください。あなたは神のこぼを愛する以上に神さまを愛してはいません。ですから、もしあなたが神さまをどれくらい愛しているか、あなたの人生にどれほど神さまを置いているかを知りたいなら、知る方法があります。あれこれと推測する必要はありません。ただ、自分自身に尋ねてみてください。「私はどれくらい聖書を愛しているだろうか、私の人生にどれほど聖書を優先しているだろうか。」なぜなら、それと同じくらい神さまを愛しており、同じくらい人生に神さまを置いているかということだからです。

重要なことなので、聖書についての5つの事実あるいは真理をまとめておきましょう。多くのクリスチャンは、微妙な位置にあり、光が何で、闇が何であるのかよくわかっていません。彼らは願い、希望を持ちますが、よくわかっていないのです。その理由は、彼らは神のこぼを人生の正しい位置においていないからです。

一つ目、神のことばを守ることは真の弟子と世を区別する。

二つ目、神のことばを守ることは神に対する弟子たちの愛の究極のテストである。愛は、私たちの従順の動機で、それは恐れではありません。

三つ目、神のことばは、弟子たちに対する神の愛の究極の理由であること。神さまは弟子たちを特別な方法で愛されておられます。神さまは全世界を愛しておられるが、弟子たちへの愛は特別です。しかし、神さまが愛しておられる弟子たちとは、神のことばを守る人々です。もしあなたが、神さまから特別の愛を受けたいなら、神のことばを守らなければなりません。

四つ目、神のことばを通して、守り従うことによってキリストはご自身を私たちに現わしてください。問題は、「主よ。あなたは、私たちにはご自分を現そうとしながら、世には現そうとなさらないのは、どういうわけですか。」と仰ることです。イエスは、「もしあなたがたがわたしを愛するなら、あなたがたはわたしの戒めを守るはずで、それがわたしの現わし方です。」

そして最後の五つ目、神のことばを通して父と御子が来てくださり、私たちと共に住んでくださるということです。それはあまりにも素晴らしいと思いませんか。私は息をのむほどです。父なる神と御子が私たちと共に住むことを願っておられるのですが、それは私たちが神のことばを守るときにだけ、そうなるのです。

祈りましょう。

天の父よ。あなたのことば、神のことば、聖書をありがとうございます、それは、私たちの足のともしび、道の光で、確かで権威あり、誤りのないことばです。主よ、今これを聞いているお一人おひとりがいくらかでもこの言葉によって気づきが与えられ、あなたのことばを愛する者となるようにしてくださるよう祈ります。あなたの恵みにより、私たちにあなたのことば、聖書が与えられ、私たちの人生に正しく据え、主イエスの本当の弟子となることができますように。イエスの御名によって祈ります。アーメン。